

論壇

マイナス金利の批判

日本銀行が今月の20日と21日に開く金融政策決定会合で、これまでの金融政策を総括的に検証すると発表し、市場関係者やマスコミが注目をしている。一般の人には縁遠い存在であるかもしれない金融政策だが、経済に大きな影響を及ぼす存在であることは多くの人が理解しているはずだ。

黒田総裁の下で日本銀行は3度、市場を驚かせるような政策を行った。2度はバズーカと呼ばれる政策で、大規模に国債を購入する金融緩和を進めた。市場を驚かせることで、デフレマインドを

伊藤 元重

学習院大教授(国際経済学)

払拭しようというものだ。その効果は甚大で、為替レートは大幅に円安に振れ、株価も急上昇した。

しかし、何度も同じ政策で市場を驚かせることは難しい。今年の初めに日本銀行がとった3度目の金融緩和策は、マイナス金利というこれまた市場を驚かせるも

るの当然だ。デフレ脱却を経済政策の中心に置く安倍内閣だ。そこから後退はありえない。この点については日本銀行も同じ考えだろう。ただ、いろいろ弊害が見えてきた金融政策を微調整する必要があるのだ。

当面、金融政策でどのような弊害が出ているのだろうか。一つは

金融政策の大きな転機

のであった。ただ、その影響についてはかならずしも評判はよくない。マイナス金利によって利益機会を縮小させられた金融機関などから批判の声も上がっている。

そうした中での金融政策の総括的検証である。多くの人が注目す

いる。イールドカーブとは短期から長期までの金利の高さを示したもので、それがフラットになっていくというのは、長期金利が短期金利と同様に非常に低くなっているということだ。

生活にも大きな影響

もう一つの問題は、日銀が大量に国債を購入し続けることで、市場に回る国債が枯渇しつつあるということだ。債券市場が機能しにくくなる。また、そもそも日本銀行がそれほど多くの国債を保有することが好ましいのか、財政の規律との関係でも疑問が出てくる。

こう考えれば、国債購入のペースを少し落とすと同時に、金融政策の緩和を維持するためマイナス

金利政策をもう少し踏み込むということがよいように思える。ただ、あまり拙速に国債の購入ペースを落とすと、長期金利が急騰する恐れが出てくる。日本銀行としては市場とのコミュニケーションをしっかりと、慎重に軌道修正が必要となる。

ここで書いた方向は、あくまで私の個人的な考えである。20日からの政策決定会合で日本銀行がどのような判断をするのかは分からない。いずれにしろ、金融政策が大きな転機にあることは間違いない。それは日本経済にも市民の生活にも大きな影響が及ぶものである。日本銀行の政策決定会合を受けての報道には、できるだけ多くの人に關心をもってほしいものだ。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。